

スペイン語圏を知る本（その57）

鈴木かほる著 『徳川家康のスペイン外交』
（新人物往来社、2010年）

評者 坂東 省次

著者は「最後に」でこう述べている。「実は、今年、平成22年は、三浦按針が徳川家康のために造船した英風小帆船が、フィリピン総督ドン・ロドリゴ・デ・ビベロらに乗せ、サン・ベエナベンツラ号と命名され、慶長15（1610）年6月13日、浦賀湊をメキシコに向けて出帆してから400周年にあたる。これが、幕府船として初の太平洋横断であった。」

そして昨年（2009年）は、徳川家康とドン・ロドリゴ・デ・ビベロの間で日本・スペイン交流史上初めての外交交渉が行われてから400周年にあたった。それで、昨年と今年、記念行事がスペイン大使館、メキシコ大使館、セルバンテス文化センター東京そしてここ京都外国語大学で行われてきたことは多くの人の知るところである。

スペインと日本の交流史は1549年のフランシスコ・ザビエル来日に始まるとされるが、1624年のスペイン船来禁止までのおよそ70年の交流史の前半はポルトガルと日本の交流が中心であり、スペインと日本の交流が本格的に開始するのは、後半とくに1584年にフィリピンからスペイン船が平戸に着岸してからのことである。しかし、1596年の豊臣秀吉によるサン・フェリーペ号事件によって、両国の交易は完全に断たれ断絶状態になっていた。

慶長3（1598）年8月18日、豊臣秀吉が京都伏見城において、その波瀾万丈の生涯を閉じると、そこに登場するのは徳川家康であった。家康は秀吉の武断政治とは異なり平和主義の外交政策を執った。そんな中で、家康は何よりもスペインとの国交回復に力をいれた、その目的はメキシコ商船の浦賀湊誘致とスペイン人造船技師と航海士、およびアマルガマ法の鉱山技師の招聘であった。

家康は江戸城に近い浦賀湊を国際港として開港し、東アジアの国々さらには太平洋を越えてメキシコはてはスペインと広く通商を行うことを夢見ていたのであった。対スペイン交渉は、

当時のスペインの植民地であったフィリピン、メキシコを通しておこなわれた。浦賀―スペイン間の貿易の確立を願う家康の前に、二人の外国人が登場する。一人はウイリアム・アダムスこと三浦按針であり、いま一人は、フィリピン前総督のドン・ロドリゴ・デ・ビベロである。

家康の外交顧問として活躍した按針は家康の使者としてフィリピンにビベロを訪れて家康の希望を伝え、またビベロの来日によって家康は直接の外交交渉にかなりの期待を持ったが、ビベロから期待した回答は受理できなかった。著者はこう述べている。「家康は、ビベロとの交渉にかなり期待を持ったであろうが、当時の国情から察すると、スペイン側が、敵国の日本に鉱夫を送り、日本に国富を齎すような愚かな行為などしようはずはない。メキシコの真の目的は、鉱夫派遣に期待を持たせ、日本占領の前哨戦として多くの宣教師を日本に送ることにあった。」

ロドリゴは1610年に家康の提供した三浦按針船サン・ベエナベンツラ号で日本人22人とともに帰国し、翌1611年にはメキシコからサン・フランシスコ号が返礼大使のビスカイノがビベロに同行した日本人に乗せて浦賀湊に着岸する。メキシコ通商の夢断ちがたい家康はビスカイノ大使とも謁見するが、同大使との交渉においても新しい通商の展開は見られなかった。むしろ、ビスカイノ大使の来日は、伊達政宗の使節のヨーロッパへの派遣へと展開していった。政宗はメキシコと直接の貿易を望んでいたのである。しかしその使節つまり支倉六右衛門遣欧使節はスペインとローマを訪れるが、日本では禁教が進むなかで失敗に終わってしまった。

家康がウイリアム・アダムスを外交顧問にしたのも、キリスト教の伝道に寛容であったのも、すべてスペインのアマルガマ法の導入に専心するためであった、と著者は結論を下している。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）